

令和7年6月24日

第7期大田区多文化共生推進協議会 第1回

令和7年6月24日

事務局説明

○事務局

事務局から、配付した資料等について説明する。

資料1、資料2の説明の前に、ほかの資料等を説明させていただければと思う。

まず、設置要綱について、改めてではあるが、この協議会の意義等を説明する。第1条で「設置」の記載があり、区民の主体的な参画により、多文化共生施策を推進するために設置すると設置目的を捉えている。

そういった意味で、委員の皆様におかれては、それぞれのお立場からご意見等を頂戴できればと思っている。

続いて、振り返りにもなるが、本日、ご持参いただいた「国際都市おおた」多文化共生推進プランについて説明する。

大田区では、多文化共生における様々な課題を解決するため2019年、令和元年に「国際都市おおた」多文化共生推進プランを策定した。それを令和5年度に改定したものが本冊子になっている。

このプランでは、国際都市おおたの魅力を高め、誰もが安心かつ快適に生活し、地域の中で活躍できるまちづくりを一般財団法人国際都市おおた協会と連携して推進するものとしている。

プラン体系について、冊子44ページをご覧くださいと、大田区では、令和6年3月に新しい大田区基本構想を作成したところである。これを受け、今回のプランの中では、44ページの左側に「大田区が目指す将来像」として、多様な文化を理解し合い、互いがつながり未来へはばたく「国際都市おおた」と位置づけている。

この実現のための三つの基本目標を設定しており、達成に向けた具体的な取組として三つの施策を柱として、右側に45ページ、実現に向けた計画事業、27の事業を位置づけている。

今回の第7期の協議会では、このプランをもとに議論等を重ねていければと思う。

重ねて、大田区ではSDGsの達成に向けた優れた取組を提案する都市として、内閣府から2023年度の「SDGs未来都市」に選定されている。その中でも、特に優れた先導的な取組を行う「自治体SDGsモデル事業」としてさらに選定されている。

こうしたこともあり、区は全庁的なSDGsへの取り組みを進めており、SDGsの

目標年次である2030年に向けて、17のゴール達成のための取組を意識的に推進し、誰一人取り残さない持続可能なまちづくりを進めているところである。このことから、プラン作成の柱にもSDGsのマークをつけているので、ご覧いただければと思う。

資料1について説明をさせていただく。資料上部、「2、第6期の大田区多文化共生推進協議会の振り返り」をご覧いただければと思う。

第6期の中では、国際都市おおた宣言に基づき、多文化共生、観光、産業、この三つの分野を重点的テーマとして議論いただいた。

その結果、多文化共生の分野における取組テーマとして、「日本人区民と外国人区民との相互理解の促進」と「日本語学習支援の質と量の拡大」を、第6期の中で最終的に区に提言するという形を取っている。

第7期にこういったものを議論するかということで、事務局からの提案になるが、資料の下部をご覧いただければと思う。

「3、第7期大田区多文化共生推進協議会に向けて」と記載があるとおり、大テーマとして「日本人区民と外国人区民との相互理解の一層の促進～誰一人取り残さない多文化共生社会の実現」、をもとに議論いただければと考えている。

現在の社会状況に触れると、日本で暮らす外国人の環境について、令和6年6月21日に入管法が改正され、新たな在留資格「育成就労」が創設された。少子高齢化を背景として、いわゆる生産年齢人口が減少し、将来的に外国人労働者のさらなる増加により多国籍化も見込まれており、今現在、区の中には130の地域と国の方の外国人がいる状況である。

区内においても、日本人区民、外国人区民との共生に係る課題等が複雑・多様化しているところである。

本課に対しても、例えば日本語学習の機会の相談や住環境、騒音の問題、ごみの出し方、外国人区民の生活状況、そういったご意見を多くいただいている。

このような背景も踏まえ、地域において日本人区民と相互理解の促進・深化、そういったものが重要になってくると考えた次第である。これらを踏まえ、テーマとして設定させていただいた。

続いて、資料2をご覧いただければと思う。スケジュール及びテーマ（案）のご説明資料としてつけさせていただいている。

まずスケジュールについては、本日の第1回、令和7年6月で議員の方への委嘱、自

己紹介、この後、またで大テーマについてご検討いただき、第2回、第3回は令和7年10月、令和8年2月に、この後、ご提案する小テーマAについて議論いただければと思っている。

第4回、第5回の中では小テーマBの議論、また、第5回では報告書の素案確認、第6回は区長報告を予定している。

スケジュールで言うと、第2回、第3回での議論の小テーマAとして、地域支え合い社会の実現に向けたコミュニケーション支援についての議論をいただければというふうに思っている。

また、第4回、第5回での小テーマBとして、外国人区民がますます暮らしやすい地域共生社会の実践ということで、暮らしの中での地域共生社会の議論ができればと思っている。

テーマについて、皆様からご意見等をいただければと思う。

○委員

この大テーマについて、小テーマAと小テーマBとの関係というのはどういう関係なのか伺いたい。

○事務局

資料1をご覧くださいければと思う。

第6期のところで、「国際都市おおた宣言」を受け、多文化共生、観光、産業という、三つの分野の議論をしていただいたところであり、その中で重点的に第7期においては、多文化共生のテーマで議論いただければと考えたところである。

このことから、日本人区民と外国人区民との相互理解の促進という大きなテーマ、キーワードを持ってきており、その中でもう少し深化、深掘りしていくところにおいて、コミュニケーションの支援や暮らしやすい地域共生の実践、意思疎通等を考え、深化した部分で小テーマA、小テーマBと設定したところである。

○委員

承知した。

○事務局

では説明について、また、テーマについてはご理解いただいたということで、会長に進行を戻す。

○会長

委員から今、ご指摘あったように小テーマAと小テーマBとの関係性が分かりづらい等あるかもしれないが、再度、スケジュールプランと、それから今日提示された資料1、資料2をご覧ください、この関係性について了解していただければありがたい。

これからいろいろなテーマが出てくるかと思う。あくまで住まれている方、より具体的には、日本人区民であれ、外国籍の区民であれ、住みやすい、あるいは近隣居住者との関係が非常に円滑にいくことが最優先になるので、コミュニケーションの必要性、重要性が語られていければと考えている。

事務局の説明のとおり、第2回では小テーマのAについて議論をしていただく運びとなる。

意見交換

第2回に先立ち、この場において委員の皆様方から、外国人区民との相互理解についてご意見をいただければと思う。また、国際都市おおた大使の方には、日本人区民との相互理解ができているかどうかについて、ご意見をいただきたい。相互理解というのはたった4文字だが、非常に中身の濃い話である。そのため、この相互理解について日々の生活の中で実際に感じていること、文化による違いをどのように感じられているか、これについて順次、ご意見をいただきたいと思う。

○副会長

学校に勤めているため、学校の話になってしまうが、外国籍の学生が今、非常に増えており、今までは、中国語圏で、授業で黒板に漢字で書くと、何となく理解してもらえるとすることが多かったが、それがもう通用しなくなったのが、今年起きている事象かと思っている。

いろいろな教員の話を見ると、そもそも授業中にガムを食べてはいけない等は、今まで指導することはなかったが、最近は、授業中ガムは食べてはいけない、帽子は脱ぐ、音楽を聞いてはいけない、そういう指導をする状況が生まれてきている。

多文化と言えばそれまでだが、我々も想像の域を広げていかなくてはならないと痛感している。

一方で、日本人の学生がどう捉えているかというと、これから日本はさらに国際化をもっと広げていかないといけない上で、異文化交流ができてよかったという意見が多い。

いわゆる自分たちの常識というものとはまた違う常識は、すぐ隣に存在しているとい

うことを体感でき、よかったと話を聞く。

多文化を受け入れるという土壌も今、非常に根づいてきていると感じている今日この頃である。

○会長

東南アジアの某国に行くと子供の頭をなでると怒られるが、私ども日本人は当たり前「かわいいね」というふうに頭をなでる。私も苦い経験があり、向こうに行って怒られた。これからは、それぞれのコモンセンス、常識が違うことは当たり前だと認識することが肝要で、生産年齢人口が減っていく中で、どうしても外国籍の方に働いていただかざるを得ない状況の下では不可欠の要件となる。加えて、家族全体で日本に来る方をどう受け入れるのか、あるいはどのように一緒に生活していくのかということも非常に重要な課題になっていく。

こうした視座に立って議論を深めていければというふうに思う。

○委員

私がボランティアをして、日々感じる印象的な出来事を紹介したい。

私が日本語を教えている20代前半の彼女は、まだ日本に来て半年であるが、やはり日本語が母国語ではないので、拙い感じだ。家族で来ているため、日本に来て一番不安なことはなにか、私にできることは何か、と質問した。すると、日本人と交流したいが、どこに行ってもいいか分からない、だから大田区のこのボランティアを通じて、日本語を教えてもらうように頼んだと言っていた。

では、日本は災害が多いが、彼女が困る際はどうかと聞くと、日本人や区に助けを求めたいが、自分も含めて知り合いもおらず、日本語も上手ではないため本当に不安だ。助けてほしいが、その声をどこに言ってもいいか分からない、日本人と仲よくなりたい、だからあなたに交流の道標となってくれないかと言われた。彼女の声を聞いて、日本に住んで困っている人は大勢いると感じた。

海外の人たちが不安を持って日本に住んでいる、大田区に住んでいるということをまず理解してあげることが相互理解の第一歩ではないかと思う。

そこで何ができるか分からないが、困ったときに手を差し伸べてあげたいと思う私たちの気持ちを、一人一人が持つことが大切だと感じている。

拙い説明だが、最近私が感じたことを皆さんにお伝えしたいと思い紹介させていただいた。

○会長

非常に重要なお話だと思う。誰にも窮状を訴えられず、家族だけで住んでいる、子供が学校に行けない等々の困った状況がいろいろあると思う。私どもが気づけていけるのかどうか、あるいは外国籍の方から、そういう声が行政にきちんと届いているのか、今後、そういったところの実例を意見交換しながら探り、少しでも外国籍の方々の不安を軽減し、ハードルが下がるようにしていくのが本筋だと思う。

○委員

私から申し上げたいものとしては、多文化といってもいろんな文化があるが、文化には上下がない。例えば、同じ日本であってもそれぞれ違いがある。一番簡単に分かるのが運転。例えば東京で運転すること、大阪で運転することは異なる。

そうすると大阪の文化は東京より低いか、そうではない。それこそ大阪の人が東京で運転したときに、東京の文化は大阪より低いか、そうではない。

自分の考えから相手の文化を見ると「これは文化が違う」と思ってしまう。文化が違うからといって、それがいい悪い、上や下ではない。

そういうことから考えて、外国人区民たちをどういうふうに見るのか、どういうふうに対応するか、これが今後課題になるのではないかと思う。

○会長

130を超える国の方々がいらっしゃって、それぞれ130通りの文化があるのだと思う。

ご家族の中でも先祖伝来と言ったら語弊があるが、長いこと培ってきたそれぞれの文化があるため、尊重できるように啓発していかないと、大きな課題である異文化共有ができないと思う。

○委員

私は、大田区の魅力を大勢の方に伝えたいと考えている。日本の文化と、ほかの国の文化、似ている文化、似ていない文化、お互い理解できる文化は重要と考えている。どういうふうの実現できるか、今後も見直しを皆さんで行いたい。

○会長

実体験を拝聴した。ご自身が持たれている文化の基軸、よりマクロには日本人が持っている文化の基軸が通じない場面があったものと拝察する。

ご自分がおかしいと感じられていることをこれからの議論の中で出していただけると

ありがたいと思う。

こうした経験値が、異文化をそれぞれ相互によく理解ができる切り口になる、あるいは鍵になるかと思うので、本日以降、積極적으로ご発言をお願いしたいと思う。

○委員

本当にテーマが大きく、課題も多い。

例えば私の居住しているところは630世帯あり、管理室の方によると1割ぐらいが、ほかの国籍の方だと伺っている。

パーティールームやライブラリー等の共有スペースがある。常々感じているが、例えば中国の方は、パーティーも大好きでよくやっていらっしゃる。それはものすごくいいことだと思う。

ただ、私たちとは交流しよう、したいという感覚が伺いしれない。あまり見えてこず、悲しさ、残念さをすごく感じる。中国の方同士でよくお話している、固まってしまっているというのが実態だ。私の住んでいるところは、できて5、6年のマンションであるが去年洗面所で水浸し事故が発生し、申し訳ないが、日本人ではない男の子が原因であった。ただ、絶対に認めなかったということも管理組合から伺い、残念だと思った。まだ理解し合えていないのかと思うことが、住んでいるところを一つ取っても感じている。

文化の違いを感じたが、ここは日本だと思った。それぞれ文化があるけれども、ここは日本のため、日本のルール等は理解していただきたいと感じる。

お互い理解し合って、ここは日本ということも分かっていたかかないと駄目なのかも感じている。

日本国籍ではない小学生の子が一人で歩いていたのを見かけた。ふと、学校でどんな感じか、その日から考えてしまい、ちゃんと溶け込んでいるのか、考えたら眠れなくなった。今、学校ではどういう状況なのかということも、私は逆に皆さんに教えていただきたい。日本語を教えている友人もいるが、海外からこちらに来て住んだり、学校で学んだりしている子は皆一生懸命ということも聞くが、小学校ではどういう感じなのかというのを本当に教えていただきたいと思う。

課題が多過ぎて何から私はすればいいのかと思い、そういった小説も読んでいます。

○会長

今のご指摘の中で重要なのは、コモンセンスすなわち常識は、一度染みついてしまうと、それを乗り越えることが難しい。例えば、日本の習慣について、入管庁で入国して

からすぐに役立つ手引き等を出しているほか、大田区でもいろいろなパンフレットを作っているが、それらが外国籍住民の手元に届いているのかどうかという点が重要だと思う。

ポイントは、2枚目の資料に示された「伝えるから伝わる」であるが、実際に伝わっているのかどうかというところをフォローしていかないとまずい。

行政の施策、すなわち具体的な取組み＝アウトプットはするものの、それがきちんと評価されて、不十分なところがあるとの声が寄せられた場合は改善する＝アウトカムであるが、それができていないことが度々あり、このことを取ってみても「伝わる」という3文字が持つ意味合いは非常に重要だ。

「伝わる」に重きを置けば、外国籍住民にいろいろなパンフレットを正確にご理解いただけて、「日本だとこういうやり方もあるのだ」というふうに感じていただければ、若干でも日本人区民との間の齟齬の状況が変わってくるのかなと思う。

コミュニケーションは、人対人もあるが、それだけではなく、行政広報というものも含めて、生活していく上で欠かせない情報がきちんと伝わっていくかどうかということ常を常にレビューしていかないといけない。非常に負担がかかるが、これは重要なステップだと思う。

今、お子さんの話が出たが、外国籍の子供たちには教育の義務が課されていない。言い換えれば、学校に行く義務はないので、学校に行く、行かないは、あくまで自分たちの自由意思ということになる。

先ほどSDGsの話があったが、子供たちを含め、「誰一人取り残さないようにしよう」ということが、世界のコンセンサスになっている。

にもかかわらず、場合によっては家の中に閉じ籠もってしまう外国籍の子もいる。そうした子供たちについて、どうすれば社会参加をしてもらえるのか、子供たちが学校に行きやすい環境、学びやすい環境がつかれるのかどうかということも含めて、これから考えていかなければならない。大田区は「SDGs先進都市」に選定されているわけであるが、そういったことにも少しつまずきが出てきてしまうことが懸念をしている状況で、貴重なご意見である。

○委員

最初のテーマで、相互理解というところだったと思うが、そもそも理解すべき相手というのはどこにいるのか。自分が相対する、あるいは接する外国人というのはどこにい

るのか、それに対する日本人というのはどこにいるのかというところである。

私は日々外国の人と接しているわけだが、ただその場から離れると、例えばそれ以外の場で、外国の方と会う機会もそんなに頻繁にあるわけではないということ。

先週NHKのクローズアップ現代という番組にて、外国人がテーマとなっていたが、とある地方行政では外国の方が、働き、学びに来てくれ、まちおこしになっているということで大変喜んでいるという姿と、一方で、イスラム教の方々は埋葬するときに土葬でなければならない、ただ土葬というのは日本で法律的には認められているが、許し難いとネットに投稿する人もおり、同じ日本人であるが反応の仕方が全く違うのは一体なぜだろうと思った。自分がその人と関わっているという当事者意識があるかないかというのが大きいのではないかと思う。

つまりそこに自分が一人の参加者として参加し、そこに外国人がいて、人間として相対したときに、自分は一体どういう反応するのだろうかということである。

そういったことが、体験できるような場というのをつくっていくというのがいいのではないかなと思う。

逆に、これをやっていかないと何が起きるかということ、相互理解の前に無関心となってしまう。何も関心を持たない、意見を持たない、外国人による事件が起けると、ネガティブな反応を起こしてしまう、こういうことの循環が非常に理解を妨げているような気がする。そのため相互理解するための場づくりを積極的にやっていき、区民の人を呼び込んでいく、そういったことが何か一つ相互理解のやり方としてあるのではないかと思う。

○会長

今、新聞や雑誌に「外国人たちの居場所がない」ということが出ている。先ほど申し上げたように、「子供たちの居場所がない、そのために不登校になってしまう」という事例も散見されているので、居場所をつくり、行政から必要な情報がきちんと伝わっていくという工夫をしていくことも非常に重要だ。

土葬の話であるが、イスラムの方は非常にお困りだと思う。今、私の知っている範囲で日本に3か所土葬できる墓地があるが、大田区の条例でも土葬を認めない形になっていたかと思う。

そういった中で、イスラムの方々に、できないのであればこういったところでは認めているということまで伝わるように情報提供できるのか、それには先ほど申し上げたア

ウトカムの発想に基づく行政サービスの質の向上が必要と思う。

居場所づくりは非常に重要であり、伝わるためのプレイスを作る必要がある。

一方、「外国籍住民がコミュニティをつくる」ということもいろいろな地方で散見されているが、そこに行政から情報を伝えようとしても壁ができており、伝えづらいという状況があるかもしれない。

あるいは、言葉が分かりづらく、忌避をするといった状況があるかもしれない。そういったことも含め、様々なハザードを下げていくことを、公共性の観点から全体的に考えていく必要があると思う。

○委員

多文化共生に関して意識のある区民に関しては、さらに相互理解が深まっているのではないかと感じている。国際交流の場もさらに増えているのではないかと感じている。

一方で、意識のない人については、一向に変わっていないのではないかというのが私の意見である。

知人、友人との雑談の中でも、職場に外国の方がいて、こんなことがあり、子供の学校で外国の子がこんなことをしてしまった、そういった話が出てくるが、正直なところ日本人だろうが外国人だろうが、その子の性格特性であるのではないかと思うこともある。

一つあった事案に関して、外国人というカテゴリーの中にその方のことを入れ、外国人というフィルターでネガティブに見ているところがあるのではないかと感じる。見えない意識の壁はあるのではと感じている。

それに対し、どのようなことができるかという、私は今回、国際交流団体で活動している区民としてこの場に参加をさせていただいているが、今、運営している団体で実施していることを二つ、紹介する。どちらに関しても誰もが自然と、気軽に、気づいたら文化交流をしている場をつくれたらいいということで、イベントを行っている。

一つ目が、音楽言語。私がブラジルにいたため、ブラジル音楽ポルトガル語が好きで集ってくれる人とのイベントの休憩時間に、外国ルーツの子供たちの日本語の授業の様子をビデオで流したり、その子供たちがクイズを出している映像を流してみたりしている。

そうすると、ブラジル音楽が好きで参加してくれただけの方が、外国ルーツの子供たちへの意識があって来たわけではないにも関わらず、ビデオを見たことで、日本に住んでいるが日本語の学習が必要な子供がいると知った。これをきっかけにして自分もボラ

ンティアに参加してみようと思う、という意見をアンケートでいただいた。

それから、大田区ではないが、以前、小岩という江戸川区の駅前でブラジルの文化を体感できるようなイベントを行った。その場合、近くに住んでいる区民が自然と通るのであるが、「何かやっている」と一緒にブラジルの踊りを踊ってくれたり、ポルトガル語でビンゴを行ったりした。その方たちの感想として、ブラジルは遠くなく、意外と近いのであると、物理的な距離ではなく、気持ち的な意味で近い、というご意見をいただいた。普段はそんなに意識はないけれども、気づいたら文化交流していた、相互理解が進めたということを、今後は私たちのような民間団体が行っていったらいいと思っている。

ただ、イベントを準備して、機会をつくらなければできないことのため、日常的に相互理解のできるような環境はどうつくっていきけるのだろうというのも、同時に今、考えているところではある。皆様のご意見をぜひいろいろお聞かせいただければと思っている。

○会長

「気づきの場」という言葉が出たが、最終的に「住民間の違いを無視」するようなアパシー、いわゆる無関心になってしまわないような環境をどうつくっていくのかということが、これから重要になってくると思う。

外国籍の方だけが寄り添ってコミュニティをつくってしまうと、日本人住民に「無関心でいてください」となってしまうのか。それが一番怖い。この点についても、皆さんに意見をいただきながら議論していきたいと思う。

○委員

私のもとには、いろいろご相談を立場上いただくことが多いが、外国に関するご相談をこの1か月に2件いただいた。一つは、日本人住民の方から、ごみ出しの関係で、ごみを指定の日、指定場所に出さないで黄色いシール、警告のシールを貼られます。その黄色いシールのあれを多言語化してほしいというお話であった。

日本語で、「これは収集できない」と書いてあるが、外国人にとっては間違った日、間違った場所、間違った内容のごみを出しても警告をしたにもかかわらず分からないままになってしまうということで、そのシールを多言語化してほしいというご要望であった。

清掃の所管に伝えたが、小さいシールにどう多言語化するのかというところは、相当

頭を悩ませているようであった。

もう一つは、住民税の納税通知書であり、何を書いてあるのか分からないという外国人がいるということで、どうすればいいかという話であった。近所の方は、これは税金であるということで、いろいろ教えてあげたということだが、その納税通知書も基本、私たち日本人が読んでも読みたくないような文字ばかりで、専門用語が出てきて、何を書いてあるのか分からないような物を、外国人はさらに分からないため、多言語化してほしいというようなお話であった。

それも所管に伝えたところ、法律が毎年変わるので、毎年多言語化するのは難しいことであるという話であった。加えて専門用語が多く、それを多言語化するのは非常に難しいというようなお話であった。

さきほどの伝える、伝わるというところの話は、もうここに凝縮しているというか、役所はもう事細かに丁寧に伝えているのだけれど、それが伝わっていないというところが、ここ最近の相談で2件あった。

以上である。

○会長

「伝わっていない」という実例をご紹介いただいたが、これだけではないと思う。ごみ出しのルールも知らないのか、という感覚になってしまいがちだが、知らないのではなくて、知ることができないのだと思う。知ることのできる環境にどう持っていくかということについては、相当の努力が必要だと思う。

アウトプットするだけではなく、どう伝わっていないのか、その実態をしっかりと捕まえて、伝える工夫をしていくという認識が重要と思う。

納税は特に大きな問題である。外国籍住民が、住民税はもとより、国民健康保険料や国民年金の掛け金を払っていないと、在留資格が取り消されてしまうという事の重大さをどういうふうに行行政側で捉えて伝える工夫をしていくのか、非常に重要である。

○副会長

私は、この区域のことでお話をさせていただきたいが、蒲田小学校、それから蒲田中学校には日本語教室があり、皆さん外国の方について理解しているようである。

どういうところに行けば溶け込めるかという話が出た。入学式、卒業式、いろいろなお祭りで必ず顔を出すようにしているが、子供はしっかりと溶け込んでいるように思う。かえって親御さんは一生懸命携わってくれているが、意思疎通ができない。学校の先生

の子供たちに接する態度はすばらしいものがあり、そういった式典に出ても、子供たちは違和感なく溶け込んでいる。それはいいとしても、親御さんは自分から入ってくるのが難しいように感じる。PTAの方が一生懸命入っていただくように、また役員にもなっていただくように、とお話をしているが、親御さんは溶け込んでいただけていないというのが残念だという気持ちがある。

私どもとしては外国人の区民の方にも一緒に、地域の自治会、町会の連合で、防災の運動会を毎年やっている。今回も10月5日、大田区総合体育館において、外国の方とも交流を深めるちょうどいい機会だと私は思っている。どうぞ皆様方もいらしていただき、雰囲気をご覧になっていただき、私たちが皆さんと一緒にできたら嬉しい。

それから、もう一つは来年3月に、新宿小学校で5町会の防災訓練があり、こちらは自衛隊の方も入っていただいく。そういうところにこそ来ていただき、一緒になって訓練できれば嬉しく思うし、ボランティアや通訳の方たちにも参加していただければ嬉しく思う。言葉が通じないお子さん、親御さんがいらっしゃる防災というのは、いつ何が来るか分かりませんので、一番力を入れている。

掲示板に訓練について掲示するが、残念なことに、日本語でしか書いていない。今度は皆さん方のお力をお借りし、多言語も入れながらやっていければと思う。何かそういうことで私たちに助言があれば、地域としても頑張るつもりである。また教えていただけたらありがたいと思っている。

○会長

皆さんのご意見を総括するようなご意見だと思う。伝わらないというか、分からないから地域に溶け込めない、そこに見えない壁があるからしょうがないのだなと思ってしまうと、子供に留まらず、親御さんまでもが孤立してしまう。

一番心配なのは、今、高度な在留資格を持って入ってこられる方が数多くいる。その多くが家族帯同で来ていて、ご主人様、あるいは奥様は職場で働き、お子さんも学校へ行っているが、パートナーの方が一人で自宅に残されてしまうと仄聞しており、孤独で過ごす方が増えることを非常に危惧している。こういった状況をなくす必要がある。また、災害の話が出たが、特に災害のときに弱者にならないような環境づくりをしていかないといけないと思う。

皆さんに時間を割いていろいろご意見をいただいた。伝える情報から一步レベルを上げて伝わる情報にどう変えていくのかという課題について、いろいろなヒントがあった

と思う。

皆様には、第2回に向けてということになるが、「『国際都市おおた』多文化共生推進プラン」の46ページから50ページを再度お読みいただき、小テーマAを念頭に、地域で支え合う社会の実現に向けたコミュニケーション支援、伝わるという観点からこれをどういうふうにレベルアップし実現をしていくのか、こういったことについて少しお考えをまとめていただいて、それぞれまたご意見を拝聴したいと考えている。

それが報告書の肉づけになっていくと思う。個別具体的な事例があれば、それも含めてご紹介していただきたいと思う。

○事務局

今後の協議会の運営に向けて委員の皆様方に対し、書面等で事務局からご意見等を頂戴する場面が多々あると考えている。まずその点、ご了解いただければと思う。

また、その中で出た意見については、会長を含め事務局で扱わせていただくことについても含めてご了承いただければと思う。

○会長

状況によっては皆さんに個別にご連絡をさせていただいて、ご意見を頂戴することがあるかと思う。

それについては僭越ではあるが、私が会長職として拝見させていただき、次回のステップに向けて内容を取りまとめ、どう活かすのか推敲させていただきたく、あらかじめご了解いただきたい。

以上